

脚部損傷。

飛行装置破損。

戦闘行動、続行不可能。

漆黒の鎧を纏った戦乙女ツバルキューレがゆるやかに空へと上り、はくむ霧の海に霞んでゆく。視界の端に映る高度計を確認する限り、私が墜落していると表現した方が正しいが、

「戦を忘れた戦乙女ツバルキューレは、存在を許されない」

回線に飛び込んだきた漆黒の彼女——ブリュンヒルデの声が、淡々と告げる。

その通りだ。もはや私が存在し続けることに、意味はない。

脳裏によぎるのは、聴音器官を震わせた断末魔の叫びと、私のもも含めた数本の槍に貫かれ、物言わぬ彫像と化した蒼の戦乙女ツバルキューレ。

『ねえ、ロスヴァイセ』

蒼の彼女——オルトリンデが私に向かって最後に告げた言葉が、鎧の内側に木霊する。

『私たちは、戦いの中でしか生きられないのかしら？』

しかし、私の空っぽの胸は、何を感じることもなかったことを、思い出す。それは、今この瞬間も。

「オルトリンデ、あなたの絶望は、最後まで理解できなかった」

刹那、この胸目掛けて突き出された槍が、

1

「わあ、すごいー！」

——声。

声が聞こえる、ということ、私はまだ生きている。

一つ、一つ。覚醒に必要な手続きを踏んでゆく。いくつもの警告が鳴り響き、自身が危機的な状況に陥っていることを理解する。意識にかかった霞は晴れども、未だ指一本動かせないことから明らかだ。

「これ、何だろう？ 人の形にも見えるけど」

「驚いたな。こいつあ、帝国の機関巨人じゃねえか」

「帝国？ 機関巨人？」

「……あー、そだな。お前にやわかんねえか」

いつの間にか、声は会話に変わっていた。自動翻訳がかかっているが、音声だけで判断する限り、敵国——女王国の言語で間違いない。全身に緊張が満ち、この限界に近い状況下でどの武装が生きているのかを確認せずにはいられない。

だが、交戦場所は帝国領内、たつたはずだ。それとも、戦っているうちに女王国の領内に入り込んでいたのだろうか。否、仮にそうであれば、領空を監視する女王国の哨戒船を確認できたはずだ。奴らが我々の交戦を見逃すとも思えない。

では、ここは、一体どこだ？

言葉を交わしているのは、一体誰だ？

その時、かろうじて生きていた前部視覚との接続に成功

して。

私の顔を、一人の少年が覗き込んでいることを理解する。つぎはぎだらけの山高帽を被り、頬に煤をつけた少年は、きらきら輝く翠緑の瞳で私を見つめていた。そはかすの散った顔はあどけなく、少年の幼さを示している。

「あなた、は？」

そう言つたつもりだったが、音声を発することができたかはわからない。外部への発声器官も潰されている可能性がある。この無数の警告の中から、正しく己の状態を判断することは、この短時間ではどうにも難しい。

それでも、少年に、私の声は届いたらしい。ただでさえ大きな目を更に見開いて、それから——笑った、のだ。安堵をちいさな顔いっぱいに湛えて。

「おはよう！ よかった、生きてるよ……！」

よかった。

その言葉が、私の、とうに失われている胸を軋ませる。時々あるのだ、遠い昔に失つたはずの部位を感覚すること

が。

何が、よかったというのだろう。動かない体の内側に意識だけが取り残されたままで。最後に記憶しているのは、冷たい槍をこの鎧に撃ち込んだ、漆黒の戦乙女の影。

けれど、目の前の少年は、ただただ無邪気に私の生存を喜んでいる。これだけは紛れも無い事実であり、そんな彼に私はどんな言葉をかけるべきだろうか？

答えの出ない問いを意識の奥底でかき混ぜていると、不意に、少年のものではない、もう一つの声が聞こえてきた。

「気をつける、ティム。噛みつかれちゃたまらねえ」

「牙なんて見えないけど」

「言葉の綾、つてやつだ。こいつあ帝国の秘密兵器だぜ、お前なんて一秒足らずでぼろ雑巾だ」

軽薄な声はどこから出ているのか、すぐにはわからなかった。気づいたところで、にわかには信じられなかった。

声の正体は、少年の肩に載っている、派手な色をした鳥の形の玩具だ。

私でも知っている、ごく単純な魄霧機関によつてあらかじめ決められている音声を繰り返すだけの、子供の玩具。だが、大きな嘴が紡ぐ言葉はあまりに流暢で、明らかに少年との会話が成立している。単なる玩具とは到底思えなかった。

ともあれ、玩具の言葉を信じたのか、一転して怯える少年をみていらなくて、つい、口を開いてしまう。

「私は、敵意の無い相手を撃つほど野蛮ではない」

少年はちいさな体を震わせて、それから恐る恐る私に視線を戻した。残念ながら、私は人を安心させる機能など持ち合わせていないが、せめて、優しく聞こえるように発声と発言内容を調整する。少年と玩具に合わせて女王国の言語に変換しながら。

「驚かせてすまない。私はロスヴァイセ、帝国軍に属する軍人だ。交戦中に飛行装置を破損し、この場所に墜落した」

「そうだったんだ。ほくはティム、墓守だよ」

「……墓守？」

うん、と少年——ティムは頷いて、己の背後を見やる。

少年の言葉に応えるかのように、辺り一帯を分厚く覆っていた**魄霧**が少しだけ薄れ、隠されていたものが目に映る。

視界いっぱいには広がっていたのは、無限にも思われるガラクタの山であった。鋼の箱、硝子の破片、建築物の残骸、大破した戦車や船までもが、霧の間にちらちら瞬く淡い色の鬼火に照らされている。かつてこの手で生み出した、戦の跡によく似ている。

なるほど、確かにここは墓場だ。墓石も死体も見当たらないが、人の手で作られた何もかもが、原初の**魄霧**に溶け行くこの場所は、そう表現するに相応しい。

ティムは、再び私に向き直り、顔立ちの幼さには似合わない大人びた笑みを口元に浮かべ、帽子を取って一札する。

「ようこそ、ロスヴァイセ。ここは、彷徨える墓所。命を失ったものが訪れる、安息の場所」

「彷徨える、墓所……」

「ロスヴァイセ、だっけ？ 所属が帝国でも、軍人なら聞

いたことあんだろ、『船の墓場』のこと」

嘴をばくばくさせて、ティムの肩に乗った玩具が言う。

確かに『船の墓場』なら知っている。撃ち落とされ発見されなかった船は、**魄霧**の海をあてもなく漂う『船の墓場』に集められ、人知れず弔われる。

死と隣り合わせの日々を送る我々の間に広まった、根も葉もない伝説——そう思っていたが、この光景を目にしてしまった今は、事実だと認めるしかない。

だが、それはそれとして、だ。

↓↓↓つづきは

《おねシヨタ》アンソロジー『OVERTHINK』で！